

猩々

世阿弥作

ワキ かうふう

シテ 猩々

地は 唐土

季は 秋

「是は唐かね金山の麓。揚子の里にかうふうと申す民にて候。さても我親に孝あるにより。或夜不思議の夢を見る。揚子の市に出で、酒を売るならば。富貴の身となるべしと。教へのまゝになす業の時去り時来りけるにや。次第々々に富貴の身となりて候。又こゝに不思議なる事の候。市毎に來り酒を飲む者の候ふが。盃の数は重なれども。面色は更に変はらず候ふ程に。余りに不審に存じ。名

を尋ねて候へば。海中に住む猩々とかや申し候ふ程に。今日は潯陽の江に出で、彼猩々を待たばやと存じ候。

「潯陽の江の辺にて。く。菊をたゝへて夜もすがら。月の前にも友待つや。又傾くる盃の。影をたゝへて待ち居たり。く。

「老せぬや。く。葉の名をも菊の水。盃も浮かび出で、友に逢ふぞ嬉しき。此友に逢ふぞうれし

き。

シテ「御酒と聞く。

地「御酒と聞く。名も理や秋風の。

シテ「吹けどもく。

地「さらに身には寒からど。

シテ「理や白菊の。

地「理や白菊の。着せ綿を温めて。酒をいざや汲まう

よ。

シテ「客人も御覧ずらん。

地「月星は隈もなし。

シテ「所は潯陽の。

地「江の内の酒盛。

シテ「猩々舞を舞はうよ。

地「蘆の葉の笛を吹き。波の鼓どうと打ち。

シテ「声澄み渡る浦風の。

地「秋の調べや残るらん。（中の舞）

シテ「有難や御身心すなほなるにより。此壺に泉をたゝ
へ。唯今返し与ふるなり。よも尽きじ。」

地「よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽
きず飲めども変はらぬ。秋の夜の盃。影も傾く入
江に枯れ立つ。足もとはよろくと。弱り臥した
る枕の夢の。覚むると思へば泉は其まま。尽きせ
ぬ宿こそめでたけれ。」